

ミニフンディオ (Minifundismo) に関する一考察

— ペルーを中心に —

上 谷 博

ラテンアメリカの世界資本主義への従属は、1960年代以来、特に著しい深化をみたが、その結果、地域内の低開発性は増々、しかも、広範囲に再生産された。この低開発の構造的本質の主要形成要素としてミニフンディオ（零細農）がある。拙稿では、このミニフンディオを総合的に考察して、低開発の拡大再生産、および、それが現出せしめる貧困のメカニズムを解明するとともに、その解決策を模索しようとするものである。

(I) ミニフンディオの定義

基本的には、以下のように定義することができよう。

(A) 第一義的には、土地の保有形態で、小土地保有をいう。

(B) アントニオ・ガルシアは、土地が次の三つの条件を満たすに不十分な（土地の）保有面積を有する零細農を指すといい、土地の経営的側面を重視する。

(i) 潜在的家族労働の生産的雇用。

(ii) 十分な生活水準を確保するに十分な手段（財源）の供給。

(iii) 真の農（業）企業組織が機能しうる可能性。

(C) こうした(A)、(B)の諸条件に基礎付けられながら、種々の経済外的強制を受け、自己、あるいは、家族の社会的、政治的、経済的、すなわち文化的生活の再生産の基盤の確立、および発展を阻止されているような状況。

ミニフンディオには「私的ミニフンディオ」と「共同体内ミニフンディオ」の二種類があり、前者はシエラ地方の一部やコスタ地方に多く、原住民共同体の残存部分、あるいはアシエンダ(Hacienda)の売却、その他により創出された私的な、小土地所有形態とその農業経営である。拙稿では、特に、ペルー中南部山岳地方（シエラ Sierra 地方）を中心とした「共同体内ミニフンディオ」について論及する。

ニコラス・リンチによれば、1969年10月の国勢調査で明らかのように、1960年代（ベラスコ軍事革命以前）には、ミニフンディオは、全国的規模では2853あり、260万の（共同体）成員を擁しており、そのうち、中央部には1152あり、南部には855あった。

地理的空間としては殆んどが、河川の上流地域や山岳地帯の中腹の海拔2000～4500メートルに位置している。これは、フェルナンド・ポジャマールが指摘しているように、征服期以後の産物であり、植民地的生産様式から資本主義的生産様式が支配的になる過程（それは今日まで継続している過程）で発生したものである。すなわち、アシエンダの副産物としてミニフンディオが存在する。したがって、ミニフンディオは、アシエンダとの関係、すなわち、資本主義的生産様式と共同体農民的生産様式との関係とにおいて、把握されなければならない。

エクトル・マルティネスによれば、全ペルーには、843,282の豊牧生産単位（体）があり、そのうち、土地の保有面積が0.5ヘクタール以下が18%、0.5～1ヘクタール以下が16%、1～2ヘクタールが22%、そして2～3ヘクタールが12.8%である。これらはペルーの全耕地面積のわずか3.6%を占めるにすぎない。また、ペルーの人口は、1940年から1961年の間に56.8%増加し、特に60年代は2.25%の自然増加率を記録している。この増加は特に共同体内ミニフンディオ地域に著しい。こうした背景が共同体内の経済的、社会的諸問題を増々複雑にするとともに、共同体成員の物理的存在を更に深刻なものにしている。

（Ⅱ）ミニフンディオの生成プロセス

ミニフンディオの歴史的生成プロセスを、(A)植民地体制下、(B)共和体制下に二分して考察しよう。

(A) 植民地体制下

植民地時代は、原住民共同体が、その生産手段たる土地の大部分を喪失し、あるいは、きわめて不十分なものに制限されるプロセスであり、ミニフンディオの原型が創造される時期であるといっても過言ではない。このプロセスを促進したのは、次のような要因であった。

(1) エンコミエンダ (Encomienda) やオブラヘ (Obraje) による土地の奪取

および蚕食。

- (2) フランシスコ・トレードのビシタ・ヘネラル(Visita general)による検地と土地の分配。
- (3) レドゥクシオン(Reducción)の施行。
- (4) ミータ(Mita)による共同体の自然崩壊(特に1590年代より)。
- (5) アシエンダを始めとする私的土地所有者による土地独占。
- (6) コンポシション(Composición)によるスペイン王室の土地売却。
- (7) ツパック・アマルー(Tupac Amaru)の反乱を始めとする、諸々の原住民の反乱後の、スペイン植民地行政府による共同体の意図的破壊。

生産性の高い原住民共同体の保有地は、その大部分が、このプロセスで私的所有者の手に移行した。生産性が高く、商品生産に、その市場性において、最適な共同体の保有地から侵食され、破壊されていった。すなわち、それは、コスタ地域の共同体の最良の耕地から始まった。

(B) 共和体制下

1820年代以降の共和国期を、①1820年～1880年、②1880年～1945年、③1945年～1981年にそれぞれ区分して、以下に考察しよう。各区分対象の時期は、生産手段としての土地が、資本主義経済の発展とともに、増々価値をもった結果、原住民保有地が、特に強烈に私的土地所有者の関心を引き、資本主義経済のそれぞれの発展段階に照応した土地経営のために収奪されるという意味において、区分して考察されなければならない。

① 1820年～1880年

この時期、ペルー共和国の歴代ブルジョワ政府は、下記のような諸政策を順次、打ち出した。

- (1) ボリーバル大統領令による共同体の解体と、私的所有制の導入(1824年4月)
この大統領令は、生産手段を欠く、無産者に、生産手段たる土地の入手取得の可能性を与えた。
- (2) 上記大統領令を憲法に明記(1828年)
- (3) サンタ・クルース政府の政令による個人の土地所有面積の制限(1840年代)
- (4) 民法上における原住民の自由民宣言(1852年)

(5) 人頭税廃止(1854年)

これら一連の政策のもとでの私的所有権の容認と、人頭税の廃止は、共同体内部の一体化を阻害するとともに、一段と分裂傾向を促進し、保有地の私的分割をさらに推進することにもなった。

この時期は、主として、コスタ地方において、先進資本主義諸国が需要する諸原料の生産が行われるとともに、原住民労働力を利用しての、グワノや硝石の開発が活発に展開された。

⑬ 1880年～1945年

1880年は、ペルー国政治史においては、大きな意味をもつ年であった。チリー、ペルー戦争、いわゆる太平洋戦争があり、その敗北は、ペルー国内の諸活動に多大な影響を与えた。

特に経済活動的側面においては、外国資本が、戦前のように原料生産の部門のみに限定されず、製造部門にも侵入し、国際的商品の生産、特に附加価値の高い商品の生産を、アシエンダや原住民共同体に強制した。共同体は、従来のような食糧の生産と供給のみではなく、国際的商品たる毛織物、乳製品、各種飲料水、ココア、コカ、小麦なども生産しなければならなかった。原住民共同体は増々、資本主義経済に包摂され、その日常生活は、これらの生産物を、これまで以上に不可欠のものだとした。ミニフンディオとアシエンダ、また、資本主義的都市との関係が、こうした経済統合のプロセスで緊密化していった。このような独占的資本主義の浸透の結果、共同体内ミニフンディオは、その経済活動(独占資本)が要求する原材料を、市場の需要に則して生産することを通じて形成されてきた。したがって、ミニフンディオは、すぐれて従属的資本主義発展の産物である。

イギリス資本主義の侵入は、コスタ地域の生産部門内に止まらず、中部・南部の山岳地帯(Sierra地域)の羊毛生産部門へも及んだ。また、カセレス將軍を中心にしたゲリラ戦争の結果、山岳地帯の中、小アシエンダは没落し、大アシエンダへの土地集中が始まった。かれら、大土地所有者たちは土地の拡大と、資本主義的生産手段を用いての製造業を開始した。すなわち、外国の資本主義勢力が、封建的アシエンダ層と結託して、原住民共同体からの、土地と労働力の大規模な収奪を開始した。アシエンダによ

る土地の収奪は凄じかった。アルフレド・カプソリによれば、1886年から1930年の間に、この地方では、3000回を超える農民暴動が発生し、南部地方のある県では、その回数が、一年に650回を越えたところがあった。⁽⁵⁾ 1900年初頭の中部山岳地帯、セロ・デ・パスコにおけるアシエンダ（鉱山会社の経営）の原住民共同体からの保有地の強奪は、特に多くの農民の反乱を引き起した。

② 1945年～1981年

この時期は、特に、1930年代の輸入代替工業化の結果、国内に中小の製造業、および商業が誕生し、逞しく成長した。これら新興産業は地方へ進出し、地方経済を支配するが、中央では諸般の事情から外国企業の傘下に入り、かれらの売弁勢力として機能した。

国家経済を全面的に掌握するこれら勢力は、主として、その商業メカニズムを通じて、増々、地方の経済組織や、直接的には封建的アシエンダを、また、間接的には原住民共同体を支配した。

(Ⅱ) ミニフンディオの内部構造

資本主義経済の副産物であるミニフンディオの内部構造を、(A)経済構造、(B)政治社会構造から、以下のように考察しよう。

(A) ミニフンディオの経済構造は、ミニフンディオ自体のもつ本来的経済性格である自給自足的側面と、国家経済構造内において、ミニフンディオが果たす役割、すなわち、位置付けを明示する補完的側面とに、二分することができよう。

(1) 自給自足的側面

ミニフンディオの自給自足的側面の特徴を、下記のように要約することが可能であろう。

- (1) 自家消費生産を主目的としている。
- (2) 多くの家内労働者が狭小な土地で、労働効率の劣悪な労働を強制されている。
- (3) 土地の生産性が低く、しかも改善の余地がない。
- (4) 高所のため、気候が不順で、生産が大いに阻害される。
- (5) 公衆衛生の改善の結果、人口が前述のように増加し、共同体内での労

働力の再生産が徐々に困難になりつつある。

- (6) 農業生産物として、コカ、トウモロコシ、ユカ、コーヒー、などを産出するが、その生産性や収益性が低い。
- (7) 保有面積が狭小で、その上、一定地域に集中的に存在しないがため、機械化が不可能である。

(ロ) 補完的経済側面

補完的経済側面として以下のような諸要素を指摘することができよう。

- (1) 同一共同体内における他の成員の援助。
- (2) 兼業として、年間50日程度、牧畜、製造、手工業（土器、木工細工）に従事する。
- (3) 分益小作農（aparcero）となる。
- (4) 特に牧羊地の借地農（arrendatario）となる。
- (5) アシエンダや牧羊場の日雇労働者となる。
- (6) 都市や各地の共同体内で、季節労働者となり、高度の技術を要しない労働に従事する。例えば、タカソタボ共同体では、戸主の40%は季節労働者となり、共同体外で就労している。
- (7) 各種公共土木事業の未熟練労働者として就労する。
- (8) 鉱工業労働者となる。

上記のように、従来の農業生産以外の生産活動をもって、生命維持や労働力再生産に要する財源を補完する。しかし、この補完的生産活動は日増しに、大きなウェイトを占めつつある。離村して、鉱山労働者や都市の日雇い労働者となる共同体成員が、資本主義経済の浸透とともに、急速に増加している。

以上、概観したように、ミニフンディオは単に、自給自足経済を基盤として成立しているのではなく、その零細的性格ゆえに、補完的経済活動に大きく依存しているのである。

(B) 政治社会構造

こうした半自律的の下部構造の上に、どのような上部構造が構築されるかを、(イ)政治（権力構造）と、(ロ)宗教（的役割）の二つの側面から考察してみよう。

(イ) 政治権力構造

原住民共同体には、原則としての共同体的自治がある。共同体的民主主義に基づき、20才以上の成人男子は、自治体を組織し、選挙で、マ

ヨール、レヒドール、アルカルデ、ゴベルナドールなどに就き行政を執行する。本来的には、これら行政職務は、なんら特権的なものではなく、制度的あるいは機能的なものでしかない。したがって、財力の蓄積手段とはなり得ないものである。しかし、現実には、共同体内の生産手段の私的所有化と、資本主義経済内への共同体経済の包摂が進行するにつれて、階層分化が生じ、このプロセスで優位にたった共同体成員が、同一自治体内に別の権力構造を創出するに到っており、また、独自の権限を有する財務管理者や宗務者、外部の各種自治体が任命する人たちがおり、内政に干渉するため、共同体成員による自治の原則は侵害されている。その結果、共同体自治は、特定の権力者に利用され、各成員は、共同体自治という虚偽の美名のもとに、かれらの利害に則応して、規制され、かつ、従属させられている。

(ロ) 宗教的役割

共同体成員の担う宗教的役割は、こうした政治権力構造の中で、必然的に考察されねばならない。共同体社会にあっては、共同体成員は、生産活動を介して、神と教会とに強力に関わっている。生産力の向上を祈念して、多くの祭事が行われる。ミニフンディオの自家消費物のかなりの部分が、それにあてられる。その他、共同体生活全般が、宗教的観点から把握され、政治経済問題として処理されることはほとんどない。したがって、宗教関係者が、この状況を最大限利用し、知識、情報などを独占し、成員大衆を管理し、本来あるべき宗教の存在意義をかれらに説かず、無知の世界に封入し、各種権力者と結託して、自己の権益の創出と維持に、自由自在にかれらを操作している。

(Ⅳ) 貧困化のメカニズム

経済余剰の創出の可能性の欠如が貧困の根源だが、では、現実的には、ミニフンディオの内部構造を通じて貧困が創出され、再生産されるのか、そのメカニズムを、(イ) 経済的メカニズムと、(ロ) 政治・社会的メカニズムの二つの側面から以下において考察したい。

(イ) 経済的メカニズム

貧困とは、物理的自己と精神的自己の両側面をもつ人間が、自己の再生産を

なしえない状態をさす。貧困の根源は、単に、上部構造や不十分な経済余剰、停滞した生産活動などにあるのではなく、わずかの余剰（生産物や労働力）が、他の生産機構との間の交換において、喪失するところにある。したがって、貧困化の阻止は、生産性の向上と、こうした不等価の交換条件の是正をもってのみ可能である。

共同体農民的生産様式と、資本主義的なそれとの間の不等価交換は、交易条件の不平等と賃金格差（価格構成の内容の相違）という二つの形態をとる。しかし、究極的には、前者が支配的な形態となり、経済外的強制がこれを補完する。この不等価交換は、時には貨幣交換の形態においてなされるが、一般には、物々交換に際して発生する。すなわち、共同体成員の余剰生産物と生活必需品との交換に際してである。一般の共同体では、トウモロコシ、ジャガイモ、コカ、羊毛などが、また、商品経済内に包摂された地域では、高い商品価値を有する、コーヒー、砂糖、綿花、ココアなどが、支配的な交換財として提供される。一方、かれらが入手する財物は、高い付加価値をもつ加工製品（小麦粉、食用油、食塩、麺類、燈油、衣服、家具類など）である。この交換において、独占資本主義段階の製品については、原価、運送費、その他の諸経費の高騰があり、一方、原住民共同体では、生産力の低下、扶養人口の増大、物価の上昇などの理由で、経済余剰の創出が、きわめて困難な事態が現出する。こうした状況下で、不等価交換が、経済外的強制に支えられながら遂行される。余剰の喪失は、土地改良、技術の改善、土地の拡大、資金の調達、労働力の改善（質の向上）など、生産手段と生産活動の積極的活用と展開の可能性を封殺し、価値の再生産は、縮少傾向を辿る一方、貧困は増々、拡大再生産されていく。

㊦ 政治的・社会的メカニズム

交換条件の悪化とともに、貧困の再生産を増大させているものに、ミニフンディオの補完的経済活動を介して樹立される、ミニフンディオ＝アシエンダ関係が生じせしめる経済外的強制としての政治と宗教がある。アシエンダの巨大土地所有者は、各種地方行政を自由に操作する政治権力構造を構築しているのみならず、流通部門の中間搾取者、すなわち、不等価交換の一翼を担う運送業者、市町村レベルの商企業者、商品の販売人、生産物の集散業者などを掌握し、自己のもつ流通網に位置づけている。中央レベルにおいても、議会や政府内部ばかりではなく、司法権力にもその触手を延ばしている。原住民共同体に対し

ては、共同体内部の新興富裕階層を売弁勢力として育成し、常に分裂状況を創出させ、民族としての団結、統一の意識形成の阻止に全力を傾注する。この策動に対する共同体成員側の効果的な反抗の組織化は、種々の障害のため進展をみない。大土地所有者は、こうした諸々の手段を通じて、顕在化した余剰、あるいは潜在的余剰の飽くなき収奪を遂行する。

今一つの貧困化のメカニズムは宗教を通じて機能する。既述のように、原住民共同体成員は植民地時代より、宗教行政を通して、中央、あるいは地方の政治権力の支配構造の中に位置付けられていた。共同体成員が、信仰心に厚い事実は論をまたないが、こうした権力構造の中では、かれらの純粋な信仰心は、絶好の収奪の契機へと転換されている。共同体経済の拡大再生産に不可欠な経済余剰は、頻繁に催される祭事を通じて、教会権力や政治権力に収奪された。祭事に際しては、多くの物資が消費された。時として、共同体成員が、その信仰心をその際の生産物の消費量をもって測定された。原住民の諸物資の消費は、とりもなおさず、権力者の利潤源であった。かくして、原住民共同体の貧困化の三大要素として、教会、政治権力、大土地所有者が指摘される。したがって、この問題の解決は、この三要素を共同体的自治政治から排除することであり、再度、かれらの干渉を受けないような共同体社会を建設することである。

(V) 解決策

ミニフンディオに内在する貧困を始めとする諸問題の解決策を以下において考察しよう。

(1) 生産技術の改革による解決

ミニフンディオ的農業生産を種々の側面から改革しようとするものであり、従来から主張されているものである。労働用具、肥料、土質などの改善、灌漑施設の拡充、品種の改良、作付物の多様化などを行い、生産性の向上とともに、生産力の強化を図るものである。

(2) 抜本的構造改革による解決

ミニフンディオ的生産様式、およびそれに基礎付けられた政治社会制度を払拭して、新たな上下部構造を構築することである。

(A) 農地改革

農耕地の拡大と合併とで、生産手段の安定化を図る。その上、共同体農

民の労働力を組織し、協同労働化を行う。生産性向上のため、同時に、農業労働の機械化を促進する。さらに生産組織を水平的、あるいは垂直的に分化させ、各種の産業を興し、機械化により創出される余剰労働力をそれに投入し、共同体経済の全般的な活性化を図る。また、生産の効率化のために各種レベル、系列の生産組合を組織する。

(B) 政治社会改革

下部構造の抜本的改革により、必然的に従来の上部構造は変更されるが、積極的な共同体自治の復権が志向され、良き伝統の強化が図られ、民族文化の積極的創造と発展が追求されなければならない。新規に創設される自治体は、一切の旧制度を払拭し、民主的諸制度を確立しなければならない。まず、農地税、水利税などを廃止し、生産意欲を刺激して、余剰の創出に努め、もって、地下水資源、水利資源などの開発を推進する。また各級の生産組織が要請する良質の労働力を提供するために、教育制度を確立する。同時に、教育機関は、共同体の連帯意識、民族意識を創造、発展させるよう努めなければならないし、民族の歴史、共同体における各成員の地位、国家と共同体の関係などを教育を通じて、成員に十二分に認識させるとともに、自覚と参画の気概を育成しなければならない。

共同体の対外関係においては、構造改革は不可避免的に、従来に従属関係の清算を要求する。

(i) 巨大土地所有者との関係

巨大土地所有制とその擬制社会を解体し、広大な遊休地や未耕地を、かつてはその所有者であった原住民共同体に返還するとともに、そこで
の不当な雇用関係を廃止する。

(ii) 中間搾取機構との関係

地方政治が、巨大土地所有者を主体とする、一部経済権力者により左右されているために、民主的に運営されず、かれらに追随する利益集団が、その政治的庇護を背景に地方経済を牛耳っているが、巨大土地所有制の解体と同時に、かれら大土地所有者により、地方レベルで構築されている政治的経済的支配組織をも解体しなければならない。すなわち、中間搾取層を排除して、各種企業家、または、企業集団からなる、真に民主的な地方レベルでの経済機構を構築し、農産物や一般消費物資の価

格を安定させ、地方経済に刺激を与え、その振興と発展を促進しなければならない。

(VI) 変革主体（積極的改革者）

以上考察した解決策を積極的に遂行する、いわゆる構造改革の主体的遂行者（変革主体）を如何に形成するかを最後に検討しなければならない。既述したように、一切の経済的余剰を収奪され、生命の維持や労働力の再生産さえ困難なミニフンディオ内部に、変革主体の構築を求めることはほとんど不可能である。共同体内部の、種々の現実的社会経済状況を、また、圧倒的な政治社会権力を有する巨大土地所有者との間にある、極めて厳しい従属関係を考慮するとき、一見、地方の、しかも、さして重要でもないこの問題も、その解決には、国家的、あるいは国際的視座からの考察が、如何に重要であるかが認識されよう。世界資本主義経済体制に規定されたペルー国家経済の中に、しかるべく位置付けられた地方経済（巨大土地所有制に基礎付けられた経済）、そのもとに全面的に従属させられる原住民共同体経済の、自律的發展のための諸政策は、少くとも、国家レベルで遂行されねばならない。それは、中央レベルでの農民労働者、民族ブルジョワジーなどによる国家権力の掌握と諸改革の遂行である。如何に、その問題が地方的、あるいは、瑣末的であっても、最早、世界的、かつまた、国家的視点からの解決なくしては、抜本的解決はありえない。こうした意味においては、1968年の軍事クーデターで発足したベラスコ・アルバラード政権は、国家内外のあらゆる側面における従属関係を打破して、自律的かつ民主的国家の建設を志向していた。ミニフンディオ問題の解決のため、諸政策が採られた。農地改革による生産手段の確保、自治体の再建など、一連の民族的な改革が断行された。しかし、1975年より、旧巨大土地所有者を中心とする保守反動勢力の反撃が急となる一方、都市労働者層や、中間層、中小商工業ブルジョワジーなどの地方経済や政治、あるいは原住民共同体の内在させる諸問題に対する認識不足などから、共同体農民との間に強力な同盟関係が樹立できず、効果的な支援体制を組織できなかった。現在では諸改革は大幅に後退を余儀なくされている。しかしながら、ベラスコ政権の実験によりミニフンディオ問題の解決は、同政権のもとで志向された政策によってのみ可能であることを十二分に示唆した。そうした意味で、ベラスコ政権の崩壊は、ミニフ

ンディオ農民には極めて残念なことであった。

(Ⅶ) 結論

以上、低開発の構造的本質の主要な形成要素としてのミニフンディオの生成、特徴、および低開発における役割について論述してきた。ミニフンディオの内部で機能する生産様式と、資本主義的生産様式との関係が生起させる不等価交換と、これを助長する搾取機構が本質的に低開発の拡大再生産を促し、貧困を現出させていることは明白である。したがって、この低開発性と貧困を克服するためには、不等価交換の除去、すなわち、それを可能ならしめる経済構造の変革が緊急の課題となる。同時に、その変革主体の確立を模索しなければならない。ミニフンディオの内部分析から、その主体形成に十分な力量を、そこに見出せない現状においては、前述した観点から(Ⅵの考察)、この問題を把握し、その目的を遂行しなければならない。また、こうした視点から照射する時、ミニフンディオは単に、ペルー、あるいはラテンアメリカ固有の問題に収斂するものではなく、われわれにも、大いに関係する問題となる。ここに、われわれが、この問題を積極的に考察しなければならない理由がある。

BIBLIOGRAFIA

- (1) Gerrit Huizer, "El potencial revolucionario del campesino en América Latina", Ed. Siglo XXI, México, 1977. pp. 203-220
- (2) Carlos A. Bertran, "Nuevo Estado de Comunidades de Indígenas del Perú", Ed. La Elite, Trujillo, Perú, 1967. pp. 173-189
- (3) Nicolás Lynch, "El pensamiento social sobre la comunidad indígena a principios del siglo XX", Ed. Centro de ERAB de las Casas, Cuzco, 1979, pp. vi-vii
- (4) Cuateumoc Cardenas, "Neolatifundismo y Explotación", Ed. Nuestro Tiempo, México, 1973, pp. 127-134, pp. 147-153

- (5) Octavio Diez Canseco, "La falsa Reforma Agraria", Ed. Minerva, Lima, 1961, pp.48-52, pp.101-107
- (6) Wilfredo Kapsoli, "Los movimientos campesinos en el Perú: 1879-1965", Ed. Lima, 1979, pp.127-134
- (7) Rodolfo Stanvenhagen, "Las clases sociales en las sociedades agrarias", Ed. Siglo XXI, México, 1976, pp.93-105, pp.217-222, pp.247-250
- (8) Pablo S. de la Jara, "Desarrollo económico, desarrollo agrícola y Reforma Agraria", Ed.P.L. Villanueva, Lima, 1963, pp.61-66, pp.70-86
- (9) Hector D. Polanco, "Economía y movimientos campesinos", Ed. La UASD, Santo Domingo, 1976, pp.68-77
- (10) Jose Maria Arguedas, "Los Ríos Profundos". Ed. Casa de las Americas, Habana, 1964, pp.150-200
- (11) "El Peruano", Campesino, el patrón ya no comera más tu pobreza, Ed. Diario oficial, "El Peruano", 1969, 農地改革法第8章 (minifundio) pp.49-51.同じく (原住民共同体) pp.53-56
- (12) Francisco Seminario, "El Tayta Yoveraque", Ed. Mejía Vaca, Lima, 1958, pp.45-100
- (13) Hugo Neira, "El puilco habla", Ed. Mejía Vaca, Lima, 1978, pp.30-150
- (14) T. Vicuña, "El Tayta cisto", Ed. Populibro, Lima, 1964, pp.10-80
- (15) Eduardo Fiorvanti, "Latifundio y Sindicalismo Agrario en el Perú", Ed. I.E.P., Lima, 1976, pp.85-95

- (16) Hector Martínez, "Las migraciones internas en el Perú", Ed. Monte Avila, Caracas, 1969, pp.99-136
- (17) Anibal Quijano, "Problema agrario y Movimientos campesinos", Ed. Mosca Azul, Lima, 1979, pp.1-10
- (18) Hildebrando C. Pozo, "Del ayllu al cooperativismo socialista", Ed. Mejía Vaca, Lima, 1969, pp.203-222
- (19) Cesar Guardia Mayorga, "La reforma agraria en el Perú", Ed. Minerva, Lima, 1962, pp.125-143, pp.151-160, pp.165-170
- (20) Enrique Valencia y otros, "Campesino e Indigenismo en América Latina", Ed. CELATS, Lima, 1978, pp.202-228
- (21) Hector Diaz Polanco, "Indigenismo, Modernización y Marginalidad", Ed. Juan Pablos, México, 1979, pp.144-180
- (22) José Matos Mar, "Hacienda, Comunidad y Campesinado en el Perú", Ed. I.E.P., Lima, 1976, pp.180-217
- (23) Castainglits Teillery, "La articulación de modo de producción", Ed. Caballito, México, 1979, pp.180-216
- (24) Antonio Garcia "La estructura del atraso en América Latina" Ed Pleamar, B.A. 1969, pp.207-288